

巻頭言

環境ホルモンの研究

玉木 武

「環境ホルモン」の名称で一般化されています内分泌攪乱化学物質は、ヒトや野生生物の内分泌系に作用して、その正常な機能を阻害する化学物質の総称であり、医薬品やその他の化合物にもそのような作用が見られることは関係者の間では一般的に認められていましたが、ヒトの精子形成能の低下や野生生物のメス化現象が環境中の汚染化学物質に影響されて発現していると言うT.コルボーンらの仮説に対して、その検証が世界的な関心事となりました。

これは、テオ＝コルボーン、ダイアン＝ダマノスキー、ジョン＝ペターソン＝マイヤーの3者共著であるノンフィクション「Our Stolen Future」(奪われし未来)の衝撃的な発刊(1997年)が端緒になっています。

この書は1962年に発刊されたレイチェル＝カーソンの有名な著書「沈黙の春」に次ぐ環境問題を扱ったノンフィクションとして、世界の関心の的となりました。特に具体的な化学物質を俎上にあげ、疫学的な手法を駆使し、また読み物としても理解しやすいジャーナリストの手による文体で記述されたノンフィクションの書物として多くの人々が手にし世界的な共感を呼びました。

ここではある化学物質が女性ホルモンのエストロゲンや、男性ホルモンのテストステロン、脳の発達に関係する甲状腺ホルモンへの影響性を持つことを示唆し、これらに対する警告を真摯に受け止めることとこれらに対する研究の必要性が求められています。

これに対して各国の行政機関は敏感に反応してその科学的調査に着手しており、化学立国の観がある日本においてもこの本の発売と時を移さず政府は、関係省庁を網羅した実体調査や、科学的研究を実施して参りました。

厚生労働省では、旧厚生省時代から「内分泌攪乱化学物質の健康影響に関する検討会」を設け、その成果となる中間報告書を平成10年11月に出しています。

それを受け、人の健康を確保するために調査研究する課題として、①無作用量よりも少ない量での作用・影響の有無 ②超高速自動分析装置を用いた対象物質の選定 ③哺乳動物を用いたスクリーニング試験法の検討 ④内分泌攪乱作用の同定・確認のための詳細試験法の確立 ⑤試料の採取・分析方法の確立 ⑥暴露・疫学的情報等の収集及び解析 ⑦リスクコミュニケーションの充実が重点課題として取り上げられ、その結果が昨年7月に中間報告追補として発表されました。また、この追補の報告書にはこれら調査研究の成果を行政施策に活用すべく具体的な行動計画も併記されています。

T.コルボーンらが示した問題の特色として、①この仮説が概念として専門家の意表を突くものであったこと ②その検証が容易なものではない仮説であったこと ③検証研究作業がはじまってからも研究者間で意見の分裂がしばしば見られ、背反する結果の報告が見られたこと ④従来の毒性学的手法では予測できない結果が報告されていることなどが中間報告では指摘されており、この問題が従来の有害性の概念では説明できない困難性があると考えられています。

厚生労働省の指定研究である厚生科学研究で「内分泌攪乱物質と健康影響に関する研究」が、本年度3年目の節目を迎え、この機会に厚生科学研究推進事業による研究発表会（シンポジウム）が企画されました。（1月16日東京、1月30日北九州市、主催（社）日本食品衛生協会）

今回発表の研究テーマ以外にもなおいくつかの関連研究がありましたが、この発表会が限られた時間内のシンポジウム形式としたため、今回は健康問題に絞った研究テーマのみとなっています。したがって「胎児・幼児への影響」「生活製品の安全性」「疫学」「性生殖器・泌尿器への影響」「精子への影響」などとなりました。

先ほど述べましたように、この種の研究には従来にない複雑でデータの収集に手間取ったり解析に前例がないなど、解決すべき課題が多く残されています。まだ結論が先送りされる研究課題もありますが、世界的関心事の研究テーマでありますことから、これからも多くの研究者参加の調査研究が行われることとなりましょう。

（（社）日本食品衛生協会 副理事長）